

学校行事	4/4 第 24 回入学式、5/1 校内陸上競技会(於第 1 小)、5/4 日の丸バスのため臨時休校、5/18~20 大阪万国博全校修学旅行、5/23~25 農繁休業、7/22~8/25 夏季休業、7/26PTA 奉仕作業、9/13 秋季大運動会、10/1 城原海岸全校遠足、11/2 写生会、11/24 読書感想文発表会、11/25 校内球技大会、12/26~1/8 冬季休業 1/18 村給食センター開設 完全給食実施、2/4 積雪多量でバス不通のため臨時休校、3/5 インフルエンザのため 1 年生臨時休校、3/15 プラザ佐治落成式全校参列、3/16 卒業式 3/24 修了式
世の中の出来事	3/14~9/13 大阪万博開催、2/11 日本初の人工衛星「おおすみ」打上げ成功、3/24 あしたのジョー「力石徹」追悼式、3/31 よど号ハイジャック事件 発生、4/10 ビートルズ解散、4/11 アポロ 13 号打上げ(打上げ 2 日後に爆発事故)8/26 植村直己が北米マッキンリー山に単独初登頂(世界初の五大陸最高峰登頂者)、7/18 光化学スモッグ問題化、11/25 三島由紀夫自決、第二次ベビーブーム(~1975 年/団塊ジュニア)
流行	【ヒット曲】黒ネコのタンゴ、ドリフのズンドコ節、圭子の夢は夜ひらく、逢わずに愛して、手紙、白い色は恋人の色、白い蝶のサンバ、明日に架ける橋【言葉】三無主義(無気力、無関心、無責任)、ハイジャック、ウーマンリブ、鼻血ブー、目が点、男は黙ってサッポロビール、スポ根、歩行者天国、モーレツ、ビューティフル【テレビ】細うで繁盛記、時間ですよ、謎の円盤 UFO【本】冠婚葬祭入門(塩月弥栄子)【文化・社会】SL ブーム【モノ・人】トンボめがね流行
この年初登場	鈴木自動車工業(現・スズキ)「ジムニー」発売(※軽自動車で初の四輪駆動オフロード車)、トミー(現・タカラトミー)「トミカ(自動車玩具/ミニカー)」発売、ケンタッキーフライドチキンの日本 1 号店が名古屋にオープン、日本の呼称を「ニッポン」に統一
この年の物価	米価 60 kg 8,152 円 ガソリン 1L54.5 円、コーヒー1 杯 95 円 入浴料 37 円、理髪料 555 円、都バス運賃(1 区間) 30 円、路面電車運賃(1 系統) 20 円、タクシー2km130 円、レコード盤 EP・400 円、総理大臣給料 666,500 円、国会議員給料 400,000 円 都知事給料 500,000 円、サラリーマンの平均月収 100,533 円

一、見よ、百千代の昔より

秀峰巖たる　飯盛を
仰ぎてつどう数百の
若き生命のかざしたる
象徴は清き柏なれ

二、見よ、はてしなき人生の

見よ、はてしなき人生の
 学びの海は深けれど
 情熱もゆる若人は
 峻嶺やどす佐治川の
 ほとりに強く咲きいでん

三、見よ、瑞光のみなぎりて

見よ、瑞光のみなぎりて
友愛の花咲く園は
温情満ちてゆたかなり
月去り星は移るとも
ながく心にとどまらん

佐治中学校歌

卷頭言

一年生作品

俳

文
作

· 作文 ·

寺 俳

詩

三年生作品

三金三作品
俳

文
作詩

十作
言文

編集後記

二一四四一五七三〇三〇三一四四五一五二六一七二七五

「山峡の子」 第二十号発刊によせて

校長 大 下 健 一

「山峡の子」が第二十号になった。人間でいえば成人式の年になったわけだ。第一号から二十年間、よくこゝまで成長したものだと思う。

このあたりで「山峡の子」の生い立ちをふりかえって見るのも意義深いことであろう。最初から指導にあたられた小谷行男先生が第五号に「山峡の子の姿」として書いておられるが、それによると当時（昭和三十一年）の三年生が一年生の時にクラスの文集として発足したものである。その学級文集の中から「土用の下刈り・中谷義人」の作文と「炭山・大谷静男」の詩が県の作文コンクールに第一位で入選、文化賞を獲得し、その後も次々に入選や佳作を出したことが記されている。

やがて第四号からであろうか、学校文集と成長し現在にいたったものである。其の後も県の文集「あじさい」や「きやらぼく」に載せられた作文や詩も多い。小谷先生は「山峡の子の姿」

の中で次のように言っておられる。「人間がたえず自己をみつめ、反省しながら一步一步成長していくと努力する場合に自分の考えや感じを文に表わして見ることは大切である。文によって自己を表現しながら探究し探究しながら文に表現するという活動をつづけることが自己の形成に大変役立つことは、文を書く「山峡の子」たちのよく知るところである。たえず自己の全感覚をみがき、思考をねりながら自己の姿を自分を取りまく社会を正確に把握し批判し正確な文を書きつづるとき、自分の発展する方向も文の書き方も理解できるようになるであろう。「山峡の子」は文をつづるよろこびを真に味わうことの出来る者にとって自由な天地である。そして故郷でもある。」と。

その後「山峡の子」は発展を続けて今日に至った。これは第一号発行以来の「山峡の子」たち二千有余人の心の発展の記録である。また編集にあたった毎年の生徒会文化委員諸君や小谷先生をはじめとして、次々に指導にあたられた先生がたの労苦の結晶である。文集「山峡の子」が佐治中学校生徒の「心のふるさと」として、今後ますます充実していくことを夢みて第二十号発刊のよろこびの言葉とする。

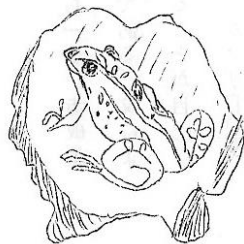
一年生作品

俳句の部

初雪や子どもうれしく初すべり
佐治川の夕日しずめば夜の川
春くればと草の芽雪の下でまつ
佐治川の清き流れに雪が降る
大雪やきれいに見える山の上
冬さかなみそ汁にしておいしいな
もち食べて新しい年むかえよう
とんどうに行く道遠い雪の朝
佐治川や光まぶしい朝の石
もう春かつばめ飛ぶ飛ぶ青い空
雪だけや太陽の下影うつる

下石明義
小林清美
小谷広子
岡村浩
田中好喜
上田広行
田中みずほ
村中一仁
田中千枝

初雪や真白な世界に一人立つ
大山やスキーが作る二本線
チラチラと降ってくるのは小雪かな
春くれば小鳥鳴くなりしげみにて
雪の中ひときわめだつ赤き南天
北風に吹かれて踊る雪の精
冬きたり身をさす風に雪も舞う
雪の下寒さにたえるかえるかな
朝焼けの佐治川ひかり空気澄む
ふきのとう青い芽をだしこんにちわ
銀世界田んぼもまっ白きれいだな
竹本康宏
下田智明
上紙誠
中谷雅枝
中谷幸隆
山本節
竹本洋実
小谷三千歳
田中幸子



詩の部

白い雪

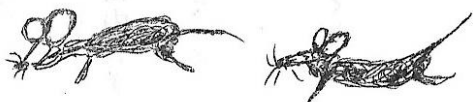
一B 西尾 佐恵子

外に出てみると
一面真白な世界
なにもない
ただ、ただ白い綿のようにやわらかく
そしてつめたいもの
その白く広々とした世界の中に
私はいる
耳をすましても
何も聞こえない
空からは 花のような 白いものが
風にふかれて
ゆっくり ゆっくり
落ちてくる
私たちが この白くて広々とした
世界からぬけだせるのは
いつのことだろうか

友達

一B 中谷 なをみ

友達って 何だろう
それはただ 自分のすきな人を言うのかな
でも 私は ちがうと思う
すきなだけでは、友達と言えない
自分がこまっているとき
ほんとうに 助けてくれる人
いつも そうだんにのってくれる人
でも 私は
そういう友達がない
どうして 作ればいいのだろうか
私の友達になってくれる人が
この世の中にいたら
どんなにしあわせだろう
はやく
そんな よい 友達を
快く むかえたい



雪

一B 西尾敏之

白い雪
きれいな雪
つめたい雪
夜の電燈の光にてらされ
きらきら光る
しかし こんな雪も
公害などでよごされ
みにくくなる
いつまでも きれいな雪で
ぼくたちを楽しませてほしい

ゆき

一B 田中貴美子

ゆきが空から ごみのようにふってくる
小さいゆき
大きいゆき
どれも上から回りながらふってくる
屋根におちるゆき
道におちるゆき
どれも最後には水になってしまう

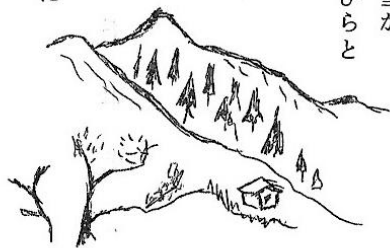
夕 日

一B 中谷雅枝

はつゆき

一B 藤原牧美

朝 目がさめて
窓の外をみた
目に矢がささるように
白い光が
私の顔をおそった
私は おもわず目をつむった
窓をあけると
大きなボタンの花のような雪が
天女の羽衣のように ひらひらと
舞いながらおちていく
手を出すと
すぐ とけてしまう
おちてはきえ
おちてはきえ
なんども なんども
ふんわりした わたのように
つもる



太陽がしずむ
はてしなく続く
遠い 遠い山へ
あかあかと輝きながら
太陽のふしぎな光が
きょうの
私の失敗や 悲しみを
心の中から取りはらってくれる
そして太陽は
きょうの私の
正しかった行動を
心からほめてくれる
しずみゆく太陽に
私は
大きな希望をいただき
胸をふくらませて
あすへのちかいをたてる

セーター

一B 谷上里美

お母さんが
夜なべをしてセーターを
あんでくれた
「カチャカチャ」
「ザーザー」
あみ機であんだ
ボカボカのセーター
二日で二枚も
あんでくれたセーター
とっくりのセーター

山の霧

一A 田中千枝

山に霧がかかっている
ドクガスにつつまれた
大きな島のように
山は
動けないからよけい苦しい
ああ
もう見えなくなってきた
山は
こまっているだろう
私が見えるかな
いきがつまらないかな
いきがつまらないかな
木はかれているし
栄養がないのかな
大きな体をしていても
元気がなさあ。
元気がでたら
力いっぱい
きりなんかふきとばしてしまえ

海

一A 中谷裕見恵

怒り狂った海
おまえはなぜ あれ狂うのか
何を望むのか
「ドドドド」
ようしやなくたたきつける波
岩にだけ散る波しぶき
何のために あれ狂うのか
何のため 尊い命をうばうのか
海は答える
「ドドドド」と
あらしの去った静けさの中
聞こえてくるのは
快く伝わる波の音だけ

空

一A 上田真佐子

空ってすみきっている
空気がたい
空って美しく輝く
お星様みたい
空を見ていると
自分もとけこんで行くみたい
空ってふしぎ
私のなやみを消してくれる
悲しいとき
涙が出そうなとき
空をながめていると
今までのつらさが
水にとけて消えてしまう



私は空が好き
空も友情でつながっている
友達みたい

さかなつり

一A 田中好喜

さかなつりに出た時
佐治川の流れにのって
じっとしている
うぐいの姿
うるこを美しく
輝やかせながら
日の当る所へ所へ
移って行くのが見えた
きりっとひきしまったその姿
人間の心のしまりのようだ

えんぴつ

一A 竹村裕子

背が高く
そしてスマートなえんぴつ
字を書く
すらすらと先へ進む
この音は
とても感じがいい
何か
歌でも歌っているようだ

山

一A 遠藤長美

山にはそれぞれ特徴がある
春には いろいろな植物が芽を出し

雪

一A 下田政雄

雪を見ていると
上に上って行くような気持ちになる
雪はいくら溶かされても溶かされても

雪

一A 前田寿恵子

ふる雪が
今日も また
雲の間を 波打って
一つ一つを よく見ると
色々な形
冷たく
やわらかく
降り積もる

雪

一A 小谷竜夫

雪はどうして白いか
しかし 白くないと
雪とは言わない
雪は空から降ってくる時
たいへん軽い
しかし たくさん積もると
すごい重さになる

夏には よみがえるような若葉
秋には 色とりどりの紅葉
冬には ほんのりと白い雪げしょう
私もこの四季の美しさに
見とれてしまう

降ってくる
これは 雪と地面の戦いだ
そして 雪は勝つ
雪は自分の力をふりしぼって
たくさん積もらせる
ぼくはこんな雪に心が動く

雲にのって

一A 田中千秋

雲にのって
私は流れていきたい
だれも知らない所へ
たった一人で
知らない道を 教えてもらい
雲の上で大きくなっていく
大きな声がし
風が吹き 波が寄せ
きびしい冬がきて
そしてまた
雲にのっていてもらくではないだろう
楽しいこともうれしいことも
こわいことも
もう私は
雲にのっているかもしれない



光と私

一A 岡村美千世

ある朝
窓を開けた
私の体いっぱい
つきささる光
目をつきさすような
あざやかな雪の銀色
その光の中に
いつの間にか
とけこんでいく私
偉大な銀世界の中で
私の悲しみが
うばわれていく
喜びだけ残った私の心を
やさしくいたわってくれる
私の心のささえとなって……………

しびれ

一A 小谷三千歳

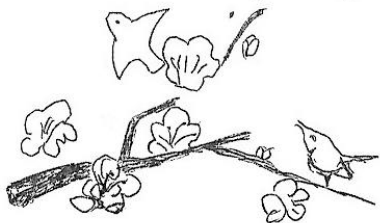
ビリビリビリ・・・
ぼくの足を電気が走る
ビリビリビリ・・・
立とうとしても立てない
足の裏をつめくっても何にも感じない
たいてみても足に電気が走っているだけ
どうしてしびれがきれるのだろう
じっとしていても
ビリビリビリ・・・
しびれる

夜空に輝く宝石

一A 岡本マリ

夜のやみの中で
きらきらまたたく無数の星
何千何億もの星が

今 この夜空に
輝いている
遠い昔を思わせるような
かがやきを秘めて
無限の宇宙にちりばめられた
宝石のように 美しい星
ずっと見つめていると
こわいくらい
心におしこまれてくる
今にも 頭の上から
降ってきそうな
夜空をかざる 無数の星は
今日も また明日の日も
そして これからもずっと
神秘なかがやきで
この夜空をうずめるだろう



冬の川

一B 井上珠美

ゴーゴーとものすごいなりをたてて
流れている川
今日もあい変わらず
楽しそうに流れている
しかし 楽しそうに見えても
どこかにさみしさが現われている
それは 雪にかこまれ
川のそばにいる人もなく
まるで
自分でなりをおこし
死の世界を流れているように
けれど さみしさ 悲しさを
自分の水の中にうずめ
ふっている雪も
相手にしないようにして
こんな状態の中から
自分の楽しさを
うみだしているようだ

雨でぬれた犬

一B 井上雪枝

外は雨が
ザーザーふっていた
犬がほえながら
私の方をにらむように
家の前に立っていた
犬は
雨でびしょびしょにぬれていた
私は
かわいそうだと思い
犬にちかづいていった
でも 犬は
ほえつづけるばかりだった
私はその犬が
にくらしくなった
でも犬は
口がきけないのだから
しょうがないと思った

雪

一A 北尾泰志

雪がふる
何千キロ いや何万キロの
空のはてから
今 静かに地上におり立ち
消えてゆく
ところが今日その雪を見る時
ぼくは胸を打たれる
木々は白くかざられ
道は深くうめられ
一面白の世界だ
その雪を見ていると
心のよごれが消え
すがすがしい気持ちになる
雪よ その白いすがたを
いつまでも いつまでも
そこに残っていてくれ

春の野はら

一A 奥田順子

犬は人間とちがって
口がきけないなんて
かわいそうだ
春の野はらには
きれいなうぐいすの声
うめの花 ももの花 さくらの花
なの花畑
よもぎ ふきのとう つくしんぼう
わらび かげろう 春風
すがすがしい春
野をかけまわる鳥
なんともいえない気持ち
美しい野はら……………

みやげ物

一A 上田 純子

学校から帰ると みやげ物がある
服を着がえるのも忘れて
そのつつみに とびつく
「あけていいか。」と私
「うん」と言う母の返事
胸がドキドキする
つつみにかけてあるひもを はさみでつむ
そして 一度箱をカタカタと 横にふる
それから 紙をほどいてふたをとる
「うわぁ！」私の大好きなお菓子だ
母に「食べていいか。」と聞くと
「今夜、お茶を飲みながら……。」と言った
ちょっと ざんねんだった
今夜がとて たのしみだ



作文の部

「思い出」

一A 中谷 裕見恵

美しく、なつかしい思い出、過去の私と未来の私、どんなに変わってくるのかなあ？

十三年の間、私は、いったい何を待たせよう。色とりどりの思い出が私の頭の中を駆けめぐる。そつとアルバムを開いて見ると、そこには、私の幼ない頃の古ぼけた写真が「君にも、こんな頃があったんだよ。」とでも言いたそうに、ちょこんとすましている。私は、ちよっぴり、「いばるな！」と言ってやりたいような気がした。

小学校への入学式、六年の時のキャンプ、修学旅行、みんな私の思い出となって、いつも消えることなく焼きついています。

友達といっしょに写した写真、笑いながら写した写真いろいろな写真が、順序よく並んでいます。中には、一ページに一枚、「どうだ、おれ様が一番大きいだろう。」

とても言うように、いばっている大きい写真さえある。ほんのちよつと、腹のたつ写真も、そして、はずかしいようで、なんとなく気持ちのよい写真も、「ぼくはここだよ」「私はここよ」と言いたそうに、顔をのぞかせている。

友達の顔、私の顔、先生の顔、みんななつかしい思い出です。「もう一度、過去に帰れたなら」私は、アルバムを見るたびに、そう思わずにはいられません。時々、アルバムを見ているうちに、どこからともなく、どうしてか涙が流れ出してくることさえあります。

私の思い出、友の思い出、だれにでもある思い出、それは消えることなく、私達の心深く住みついている。それは、何にもたとえようのないくらいに……一瞬のうちに逃げ去っていつてしまう。ちょう特急のように。ひきょう者、「どうして、逃げようとするの!」とさげすみたい……私達は本当に成長した。

私達の歩んだ道、そして深い思い出。

私は、いつまでも、この色とりどりの思い出を大切にしていきたいと思う。赤色の思い出も、そして青色の思い出も……。

人間・生命について

一 B 上 紙 誠

まず初めに、みなさんといっしょに、人間とはどうあるべきか、それについて考えてみましょう。

みなさんは、こういった経験がありませんか。ぼくは時々、どうして人間なんかに生まれてきたのだろうか、イヌやネコの方がとてもいい、イヌやネコだったら、自分のいうままだ。だれにもきがねしなくともいい。自分のおもいのままだ。それなのに、人間はイヌやネコのようにはできない。それは、人間には、法律があるからだ。でも、やっぱり人間はすばらしい。イヌやネコと違って進歩がある。人間は、やっぱりいい。ぼくは、そんなことを考えるのだ。

結論としては、人間の方がやはりいい。それというのは、ぼくの母がログゼのようにいう。若い時の苦労は買ってもしろと、昔の人はよくこんなことを言ったと思う。ぼくは、イヌやネコには、やっぱりなりたくない。もしなりたいたと思つたならば、ぼくは、自分自身に負けたことになる。自分に勝つてこそ人間であり、また、喜びで

いためていて、あまりとべなかつたのです。ぼくは、チャンスだとばかりに、鳥をめがけて雪だまをなげました。でも、いっこうに、鳥にはあたりません。鳥は、羽をいためていながらも、ひっそりになってにげていきました。また、ぼくも、にがしてたまるものかと、鳥をおいかけてました。でも、そのうちに、ぼくは、その鳥がみじめでなりません。自分の羽がいたんでいるばかりに、命までなくするなんて……。

鳥は上をむいていました。ぼくも鳥と同じように上を見ました。すると、ほかの鳥が空の上を飛んでいるのです。上を飛んでいる鳥は、下の方にいる鳥に、こういつているようでした。「オイ、その鳥、おまえは空を飛べないのか。」ぼくは、そんな鳥をころすことはできませんでした。

みなさん、人間の生命はひじょうに尊いものです。といて、動物や植物の生命は、どうでもいいなんて思つてはなりません。動物や植物でも、人間と同じではありませんか。この世の中に生まれ、育ち、そして死ぬ人間と同じではありませんか。みなさん、動物や植物の命を大切に守つてやろうではありませんか。

そして、みなさん、命をたいせつにしようではありませんか。この尊い命を！

もある。人間とは、つらいこと、かなしいことがあつても、それに負けないで生きていく人、そんな人こそ人間ではないでしょうか。

話はいかがでしょうか、生命ということについて考えたいと思います。みなさんは、生命といったら、なにを考えますか。生命と一口に言いましたが、人間だけの生命ではありません。この世の中に生きている物すべてをいっているのです。みなさんは、動物や植物の生命をうばつたことはありませんか。それはみなさんの全員、その生命をうばっていると思います。ぼくも、人間の生命は、まだ一度もうばつたことはありませんが、植物の生命や動物の生命をうばつたことはありません。

二、三日前のことでした。ぼくの家裏には、竹やぶがあり、冬になると鳥たちがやって来ます。ぼくが、ちようど道で遊んでいる時でした。一羽の鳥が土地をほぜくっていました。ぼくはその時、鳥のまる焼が目から少しのあいだはなれませんでした。そして、その鳥をつかまえることにしました。ぼくは、そおと鳥に近づいて雪で鳥をねらいましたが、はずれてしまいました。でも、鳥はにげませんでした。そんなことを二、三回しているうちに、鳥に雪だまが当たりました。そして、鳥が遠くの方へにげていくのだろうと思つたら、その鳥は、羽を

おじいさんの死

一 B 山 本 幸 一

ついこの間までは、あんなに元気だったおじいさんが、二月九日の夕方、なくなつてしまつた。もう、あのしわのよつた笑顔が見られなくなつたのだ。

親類から電話がかゝつてきたとき、母が、まっさおな顔をして、少しふるえながら、ぼくたちにおしえてくれた。なんだか、ぼくの心のかけらが、けずられたように感じられた。

翌朝、ぼくは、父母と二人の弟と、親類の家に行つた。バスの中からも、おじいさんの姿が目にかんできた。家に着いたのは、十一時ごろだった。いつもなら、元気な顔でむかえてくれたおじいさんが、いない。家の中にも、いつもの笑いが少なかった。

へやにはいつてみると、少し笑っているように思えた。その笑いが、とても楽しそうだったので、まだ、ぼくの横で、楽しさを語っているように思えてきた。

午後のそう式の最中、ぼくの回りから、すすり泣く声が聞こえてきた。こんなに早くなくなるなんて、ぼくは

思いもよらなかった。

しばらくして、墓に行くとき、もう、あのしわだらけのおじいさんは、ぼくの手のとどかない所に行ってしまったと思うと、涙が出そうでならなかった。

その夜、なかなか眠ることが出来なかった。もう、今日のことは忘れて、早く寝ようと思った。

次の日の朝は、雪がふっていた。おじいさんのぬむつている墓も、うつつらと雪げしょうをしているだろう。ざしきに入ると、きのうはなかったような静けさが、ぼくをおそった。外には、雪の中に、きのうの足跡がうっすらとついていた。と、その時、空の雲のわれめから、まっ赤な太陽が顔を出した。それが、なくなったおじいさんの顔に見えた。

『走れメロス』を読んで

一 B 井上珠美

みなさん、人を心から信じさせることが、どんなにむずかしいことか知っていますか。そんなことは全く気にもかけていなかった私は、そのむずかしさが、この本を読んで、はじめてわかりました。

まったのです。このことを聞いたメロスは、あきれてしまいました。ほんとうにあきれるのもむりはないと私自身も思うのです。いかに人々の心が信じられなくなったからといって、死まで追いやらなくても……。

単純な彼は、さっそく王城へはいつて行ったのでした。そして、その王様と何とか話し合って、妹の衣裳、その他を買って、必死で村まで飛ぶようにして走って帰ったのです。

さて、王との話し合いというのは、いったいどんな話し合いだったのでしょうか。それは、想像もつかないほどのたいへんなことでした。というのは、彼の友だち一人の命にかかわる問題、つまり、彼が家に帰って、妹の結婚式をすまして、再びこの町に来たらよし、来なかったら、友だちの命はないということなのです。早く言う、人の命と人の心とをひきかえにする。そういうことなのです。しかも、期限は三日間、はたして友だちの命は救われるのだろうか、ひやひやします。

家に帰った彼は、結婚式をすませ、あくる日、町に出ようとしたら、大雨が降り出したので、また一日のぼすことにしたのです。その日の朝起きてみれば、よい天気急いで、町に出るしたくをし、走って出かけて行きました。山を越え、谷を下っていた時、途中にゴーゴーと流れて

この本では、メロスという男、人を信じるこのことができなくなっていた王様を信じさせることに成功したこの人が、主人公になっています。それでは、これから、彼の行動、それについての私の感想、感動したことなどについて説明しましょう。彼は、村の平凡な牧人で、羊たちと平和な毎日を送っていました。しかし、ある日、彼の妹のささやかな結婚のために、いろいろな品物、衣裳を町に出て買ってこなければなりません。そのため、彼らの村からだいぶん離れた町へ、山を越え、谷を下ってようやく町へ出たのです。こゝからです。事件がおこってくるのは……。

町に出てみたところ、昔の明るい様子は全く見られないで、暗い、さみしい不安な感じがしたのです。そこで彼は、町の人に、そのようなことについて、くわしく質問をしてみました。ある人は、こわがって何も答えてくれませんでした。ますます不吉な予感がしてきた彼は、もう一人の人に尋ねて見たのです。その人も、初めはこわがっていたようだったのですが、あたりを見回して安心したらしく、ポツリ、ポツリと話したのです。

その話というのは、はじめ、ポツ、ポツと書いていたように、王様は人々を信じることができなくなつて、数人の人、つまり自分の妹、皇后様などを殺してし

いる川がありました。その川には、きのうまで古ぼけた橋がかかっていたのですが、きのうの大雨のために流されてしまっていたのです。さすがの彼も、これには弱った様子でしたが、友達のことが心配になったのか、浅い所は、浅い所はと、川をみつめていました。場所が見つかったのか、きびしく流れている川に抵抗するようにしてようやくくむこうへたどりついたのです。こんな彼の行動に感動するばかりか、すっかりほれこんでしまいました。そればかりでなく、この世の中に、こんなにもして人の命を逆う人はいえるものだろうか、頭を左右に振って感心するばかりです。ようやく川を横ぎり、つかれてしまった彼をおそうものさえ出てくるのです。

そんな状態の中から逃げ出し、ようやく安心したかと思えば、頭がいたくなり、王城へ行かせてくれないのです。しかし、どういうわけか、フツと彼の頭の痛みを取り除いてくれたのです。

元氣を取りもどした彼は、無我夢中で王城へ向かって走り続けたのです。こんなメロスの姿を目に浮かべると「走れメロス！ 走れメロス！」と応援さえしたくなります。

彼が王城についたのは、期限三日目の夕ぐれのことでした。彼の友だちは、はりつけにされていて、もう少し

で殺されるというところだったのです。しかし、彼が来たので、殺されなくてすんだということなのです。

このメロスの行ないに感心した王様は、それ以来、人が心から信じられるようになったのです。これで、人と人との間には、いかに信じ合うことが大切なことがよくわかったと思います。

寄宿舎でのある出来事

一 A 上 田 広 行

ぼくは、生まれて初めて団体生活を経験した。そのせいか、はじめの頃は、おどおどしていた。

ある日、こんなことがあった。雪がたくさん降って、学校が休みの日だった。先生が英語のテストをやると言われたので行ってみた。そして、じょうだんだった。だから、来たつもりだと思って、バスケットをみんなといっしょにやっていた。一時間半ぐらいしていたら、九鬼先生がこられた。「玄関の所を、雪かきしなさい。」と言われた。初めは、足でやっていたが、雪をまるめ、だるまを作るときのようにして、雪をすてる。それが、ついだるまを作ることになった。それで、作っていたら

戦争という恐怖に一つまれながら、明るく、強く生きていき、最後には、戦争の犠牲者となっていく、アンネ・フランクの日記です。

第二次世界大戦中、オランダがドイツに占領され、アンネたちは、ユダヤ人であるために、アムステルダムのも秘密の隠れ家に住みました。そして、ナチの目を逃れながら、苦しい生活を送るのでした。

アンネは、かくれ家の生活がこんなに苦しいものかといつも、日記に書いています。たとえば食事のことですが、初めのころは、バターでも、パンでもありましたが、月日のたつうちに、だんだん乏しくなり、ついには、くさったものまで食べるのでした。私たちにとってみればちょっと考えられないことですが、アンネたちにとっては貴重な食べ物です。

服でも、日用品でも、なんにもむだにするものはありません。せめて、食べ物だけはなんとかしてあげたい気持ちでいっぱいです。

まだ遊びたいさかりの子から、自由をうばっていき、底知れぬ恐怖と孤独の中で暮らすには、どれだけの勇氣がいることでしょうか。アンネは、ある日の日記にこう書いています。

「戦争が何の役に立つのだろうか？ なぜ、人間は仲よ

小林先生もいっしょに、手つだってくれました。みんな、楽しく、大きなだるまを作った。

それから、寄宿舎で昼食を食べた。少しして、学校から遊んでもよいと言われたので、遊びにいった。ぼくたちは、バレーボールをしたり、バスケットをしたりして遊んだ。それから、講堂の前の車のはいる所の雪かきをみんなでやった。ぼくも、はじめのうちはやっていたが少しなまけていたら三年生におこられ、けんかをしてしまった。帰りに、店から英語のノートを買って帰り、英語を書いた。しかし、すぐかなおりました。寄宿舎の生活がそうさせたのだろうと思う。

団体生活がいかにむずかしいか、だいじなことがよくわかった。しかし、そこから、これから先ぼくたちが大きくなっていく時に、必らず役立つことがたくさんあると思う。

「アンネの日記」を読んで

一 B 中 谷 雅 枝

この本は、戦争という異状な状態の中で暮らした、ある少女の記録です。

く平和に暮せないのだろうか？ この破壊は、いったい何のためだろうか？」

これについて、私も考えることがあります。私の考えは、政治家や資本家に戦争の罪があるような気がしますが、しかし、アンネの考えは、一般の人にも罪があるようにのべています。一般の人は立ちあがって革命をしているはずなのに・・・と。そして、人間は気違いじみていると言っています。

戦争のために、何百万というお金を使いながら、貧しい人のためには、一文のお金も使わない。食べ物をくさらせている所もあれば、餓死していく人もいます。アンネは、一日も平和を祈らぬ日はなく、自分だけでなく、世界中の人々が、平和な暮らしになるようにと願うのでした。

八月四日、その日もまた、いつもと変らない隠れ家の生活が始まりました。ところが、ナチにみつかり、収容所へつれていかれたのです。そこでは休む間もないほど労働をさせられ、その後、最大のユダヤ人屠殺所につれていかれた。身体の弱い者は、すぐガス室へ入れられ殺されるのでした。それが、どんなにむごいことわ、私には想像が付きません。いいえ、想像のつかぬほど、むごくおそろしいことなのでしょう。アンネを知っている婦人らは語っています。

「アンネは勇敢で元気でした。親切で、直情的で、感情が豊かで、開放的で心にあることは決して隠しませんでした。乏しい食物もわけてやり、泣きごと一つももらしませんでした。彼女はりっぱな子どもでした。実に驚くほどりっぱな……。」

その後、アンネはチフスにかかって死んでしまうのです。アンネは、いつでも勇気と忍耐力を持ち、多くの困難にもめげず、どんな立場にたっても、みんなの幸せを望むことを忘れなかった。

アンネや、その他多くの人々の死をむだにせず、一日も早く平和な世界がくるように祈りたいと思います。

「ボクちゃんの戦場」を読んで

一 B 中 谷 静 代

「先生、集団疎開ちゅうのは、遠足みたいなもんですか。」

メガネをかけた小川君がきいた。

「ちゃいますネ。泊まるさかい、修学旅行や。」

鯛あたまの高村君が答えた。

「賛成。——」人より二倍半大きな声で、元気いっばい返事したのは、ガニちゃんだった。それから、みんなは、先生に疎開へ行ったら、おかあさんとはしばらく会えないことや、日本が戦争に勝つためには、どうしたらよいか、集団疎開にいけない者に、ついていける者の条件など、いろいろおそわった。そこで、けっさくだったのは、先生が、どうしても集団疎開にいけない者について話しておられた時だった。

「どうしても集団疎開いけない者について話す。……特に体の弱いもの、家のつごうで田舎へ縁故疎開する者、ほかに、ふとんの中で小便する者や、何かに言うに言われぬ秘密がある者、例えば、デベソ。」そう言ったとき、デベソの高村君が、ドキッとしてヘソをおさえたことだった。

こうしてボクちゃんは、「あとは、身体検査に合格をして、疎開へいくばかり」と、もう大はりきりだった。しかし、喜んだものの、体の弱いボクちゃんは、身体検査がおそろしくてたまりませんでした。なんとしても合格させてやりたい。こんなに喜んでいるボクちゃんの望みをかなえてやりたい。そう思いながら、先を読んでいた。

とうとう身体検査をやらねばならぬ日がやってきた。

この本を開いたら、最初にこの文章が目の中へ飛びこんで来た。私の目に一瞬涙が浮かんできた。と同時に、このお話は、まだ日本が戦争に明けくれていた頃の、小学生が、戦争について、また疎開について、どういう風に解釈をし、戦争に勝つために、どんな心構えでいたかを、おもしろく、楽しくえがいたものではないだろうかと感じた。というのは、小川君や高村君の言葉が、たいへんかわいらしく、いじらしくかかれていたからです。

ボクちゃんは十才でした。まだ、疎開のことなど何も

知らず、おもしろい旅行だと思っていたのです。この幼ない子供たちを想像すると、かわいそうでたまりません。しかし、話は、「かわいそう」どころか、以外な方向へ転回して行くのでした。では、話を教室の中へもどして

いきます。

白岩、朝比奈、高村、小川、ボクちゃん、みんなの目が、光る中で先生は、このように疎開を説明された。

「長い長い汽車に乗って……。」

「遠い遠い田舎へ行って……。」

「毎日、毎日。」

「来る日も、来る日も……。」

「……。」

「泊まるンヤ。」

これは、診察室のことです。

「汗をかいてるナ、今までに大病は？」先生の声。

ボクちゃんは、できたらうそをつこうとさえ思ったので

す。

「ア、ア、ありま、せ、す。」

「ありませすとは？」

「すう。」

「スウ？」

ボクちゃんには、とうとううそがつけなかった。

「よっしゃ、エエやろ、丙種合格。」

ボクちゃんは、とび上がった喜こんだのです。

こうしてボクちゃんは、疎開へ行くことになったので

した。しきりに、おかあさんのまぼろしを追いながら、

「おっかぁ！おっかぁ！」と、きたない言葉を投げ

けていたのです。

そのとき、列車は、いなかへと動きだしたのです。

友 情

1 A 西村 智昭

私達は、友情によって結びついていますが、友情だけで結びついていてはいません。でも、友情というものがなかったら、とうぜん友達ということがなく、中学校、小学校全国の学校はできてないでしょう。他の人との親しみも協力精神もなく、現在あるような日本はつくれなかったと思います。

でも、現在の日本でも、友情というところが通じない人がいるかも知れません。でも、友情は、どんな人でも通じなければなりません。そういう人は、他の人を信じているうちに、自然に生まれてくるのではないでしょう。でも、むりやり友情というものを作ろうとしても作れません。長い間、友達としてつき会っているうちに、その友情が、だんだん深くなり、切っても切れない友情になるのではないでしょう。

友情には、初めはあるけれど、終わりということはないのです。でも、友情が深まっていく途中で、何かがおこり、くずれてしまい、それがにくしみに変わってしまうということもないとはいえません。

友情とは、石の積み上げみたいなもので、初めは、友

情は自分自身気づかないうちにできてきているかわかりません。でも、積み上げる途中で、はかなくこわれてしまうことがあります。私は、友情は、こんなはかないものでいいのだろうか。そう思います。くずれても、また最初から、みんなが協力して、自然に積み上げなければならぬのです。友情には、最高ということはないのです。友情一つだけではないのですが、友情でいつか学校から国へと広がり、やがては、友情ということで、世界中が平和になるのではないのでしょうか。

鳥を取った日

一 B 光 浪 信 雄

二月十一日に、生まれてはじめて、ぼくはこぶつを作りました。その日、いろんな所においてみたが、いっここうにかかりそうにないのであきらめ、家の前において遊びに出ると、豊君が、こぶつで鳥をとっていました。だが、いっここうにかかりそうにありません。ぼくもたいぎくなり、家へ帰りました。

次の日、歩いて学校へ出なければならぬので、朝早く出かけるとき、こぶつをよくみると、何もかかってい

ません。しかし、おすれものをしたので、家に帰りました。すると、どうでしょう。鳥がかかっているではありませんか。よく見ると、かしどりでした。家の中に持って入り、おとうさんにあずけようとして、とりをはなすと、家の中をとびまわり、なかなかつかまりませんでした。時間がきたので、気になりながら家を出ました。ぼくは、心がうきうきしながら学校へむかいました。途中で秀樹くんと広行くんにあい、ぼくは、ひとりでに自慢したくなりました。けれど、広行くんは、信じてくれません。ぼくは、いっしょうけんめい言いはりました。その結果、ようやく信じてくれました。その日一日、ぼくはうれしくてうれしくてたまりませんでした。

班活動のあり方について思う

一 A 上 田 純 子

私は、これから、班、および班活動のあり方についてみなさんと一緒に考えてみたいと思います。

中学校に入って、私達は学科の勉強の他に、共同生活の最低基盤としての班活動について、随分と教えられて

きました。私はそのむずかしさ、その重要さをつくづく感じさせられました。私達は、小学校の時には班を作っていました。しかし、それは掃除と一緒にしたり、給食の準備、あとかたづけを一緒にする程度の班で、これほどまでに組織だてられたものではありませんでした。今、私達の班は、レクレーション係として、学級のレクレーションの仕事を受け持ち、学活の時間に行なう月一度のレクレーションや、毎日のホームルームの時のレクレーションの計画をたてたりして、私達の学級全員が明るく楽しく学校生活が行なえるように、いつも気をつけています。と同時に、学科では英語と美術を受け持ち、それらの学科の準備やあとかたづけ、そしてクラスの全員が、それらの教科の成績が少しでも良くなるよう取りはかっています。特に、私は班長として、これらの仕事を十分に果たし、他の班と一緒に私達の学級が向上し、活発な活動ができるよう一生懸命に頑張っています。

しかし、みなさん、私は班長として、自分の班に与えられた仕事は何とか果たせ、クラスの人の迷惑にならないければ、それでいいのでしょうか。私は最近、それ以上にむずかしい班長としての仕事があることを知りました。私の班は、男子三名、女子四名の七名でできています

が、この七名の者が、みんな協力して班の仕事をやってくれるとは限りません。班会議を開いても集まってくれない者がいるし、何かすると、男子と女子との意見がくいちがい、けんかになってしまいます。班のため、学級のために大変いいことだと思って仕事を計画しても、できるだけ何もしたくないという考え方から、賛成してもらえないこともあります。私はこんな時、本当に何度もう泣きたくなりました。自分と意見のあう者だけで班の活動をするのは簡単です。それだけでも班の仕事は何とか果たせます。無理をすれば、自分だけでも班の仕事が果たせるかもしれません。

しかし、みなさん、一体班の仕事はだれのためにやるのでしょうか。班長が先生や他の班からほめてもらうためにやるのでしょうか。——私は、班の仕事はクラスのためにやるものであり、それが班員のためになるものでなくてはならないと思います。では、班員が一致協力して班の仕事をやることでして、くれるようにするためには、どうしたらよいでしょうか。それは、班員がお互いに理解しあい、本当に仲の良い友達になることだと思っています。

これは、つい最近のことですが、今までとても活発で一学期には班長までしていた私のクラスのある人が、二学期になって、一学期の時の活発さが一つも見られなく

「トムおじさんの小屋」を読んで

一 A 北 尾 泰 志

ぼくは、この物語を読み、トムの行ないに深く感動した。それは、主人が「きさまをちゃんとくしてやるから、昼になまけた女をむちで打て。」と言った時、トムはそれをことわれば自分がむちで打たれ、手や足をもらえるということがわかってるのに、「旦那さま、それはできない。」とことわったのだ。もし、それがトム以外の黒人だったら、むちで打たれるのがこわくて、悪いとわかっている、それをやったかもしれない。しかし、トムは、自分だけよくなっても、みんながよくなければならないと考えたのだろう。ぼくも、時々自分さえよければと思うことがある。ところが、この物語を読み、それが、いかにはずかしいことか、それが人を不愉快にさせ、どんなに苦しめるかということがよくわかった。そして、自分に一生の苦しみとして残るということもわかった。ぼくは、このトムのすがたを見ると、自分さえよければと思っていけない。いつも、人のことを考えなさいと語りかけているように思えた。

なっていました。私は、一学期に班長にまでなった人だけに、とても頼りになると思い、二学期には、その人を私の班員の一人として選びました。でも、その人は、私が思うように少しも活発にしてくれませんでした。私はどうしてだろうと、すぐく気になっていたところ、ある日、私の班の日誌に、その人は「友達がほしい。」と書いていました。先生にも、その人は「話し合える友達がほしい。」と言ったそうです。私は、それを読んだとき、とても反省させられました。班長として、ただその人に協力を求めるだけで、その人の友達になってあげて、少しも考えてみなかったのです。

みなさん、私達にとって、班という小さなグループは大変大事なものです。そして、その班をよりすばらしく活発なものにするには、何よりもお互いの友情が大事だと思います。班長は、班員を愛し、信頼し、班員も班長を信頼し、助け、お互いに協力して、すばらしい班を作るのです。

この小さな班が集まって学級ができ、そして学校が、社会が作られているのです。明るく住み良い社会を作るために、まず、自分達の班をすばらしいものにしようではありませんか。

(弁論文)

ぼくは、欠点をおしえ、注意してくれたトムが、もとの主人のむすこが買ひもどしに来た時、その人と手をにぎり、神様に感謝して死んでいくのを見ると、悲しくなり、差別というものについてのいかりをおぼえずにはいられなかった。

ぼくには、アメリカにいる黒人達の自由をとりもどすことは、到底できないだろう。しかし今、自分達の学級の中で、テストの点で、あの人は頭がいい。あの人は頭が悪いと差別しているのをなくし、今の自分達の自由に感謝し、それを守ることができる。それがぼくの心に語りかけてくれたトムに対してのお礼であり、自分にせいっぱいできることだと思う。

ぼくは、それを心に深くきざみつけ、これから先もトムを思い出してゆきたいと思う。



勝利の歌 (応援歌)

- 一 燦たる栄冠我に輝き
歌え若人勝利の歌を
熱き血潮に燃ゆる若人
勝ちたり今ぞ今ぞ勝ちたり
- 二 我ら称えん勝利の時を
聞け高らかに歌う凱歌を
月の冠は我らの頭上に
勝ちたり今ぞ 今ぞ勝ちたり

熱血燃ゆる (応援歌)

- 一 熱血燃ゆる 我が選手
汗と涙の 結晶を
示さん時は 今なるぞ
母校の栄誉を 双肩に
力の限り いざ競え
- 二 精気あふるる 我が選手
今日のある日を胸に秘め
あまたの試練を堪え忍び
鍛えに鍛えし力技
燃ゆる若さでいざ競え
- 三 黒金のごと我が選手
正義を愛し遵法の
スポーツマンシップの体现者
これぞ栄えある我がホープ
力と技をいざ競え

佐治健児の歌 (応援歌)

- 一 三国おろしが吹きなびく
背には中国山脈を
眼下に清き佐治の友
流れに育つ佐治の友
いざ奮い立て佐治健児
- 二 朝に夕べに仰ぎみる
高き希望の峰々が
我らを強くさとすなり
励みすすまん佐治の友
いざ奮い立て佐治健児
- 三 高嶺の百合の美しく
その香満ちたる佐治川は
我々乙女の誇りなり
気高く咲けよ佐治の友
いざ奮い立て佐治健児

日頃鍛えし (応援歌)

- 日頃鍛えし健脚を
試すは今日の今なるぞ
勝つかぶとの緒をしめて
奮えふるえ
あなうれし 喜ばし戦い勝ちぬ
あなうれし 喜ばし戦い勝ちぬ
実力ついに成功し
予期の大勝 あなうれし
佐治中健児の生粋は
それここにありこを見よや
その名も高き佐治中は
威風堂々あたりをなぎたおし
それがんばれ佐治勝てよ
それがんばれ佐治中よ

編集のあとに

入試、期末考査を目前にひかえたあわただしい中で、私達の文集「山峽の子」第二十号の編集を終えました。作文・俳句・詩などたくさん作品の中から、これだけ掲載しましたが、おしくも紙面などの都合でのせられなかった作品もあり、投稿者の方々に申しわけなく思います。

時代の急激な進歩の中で、ラジオ・テレビ等が大きく普及し、私達の生活は文字に接することが大へん少なくなりました。読んだり書いたりする生活が、見たり聞いたりする生活に変わって来たといえましょう。

しかし、私達はこのまま時代の流れに押しまわられてはならないと思います。

読んだり書いたりするためには「考える力」が必要なのです。私達はもっともって考えていくためにも、書いたり読んだりすることが必要なのです。

テレビにばかりかじりついていないで、静かに読書し、自分の考えを上手にまとめてみましょう。手帳やノートのはしに自由に創作してみましょう。出来た作品はどんな先生に評をもらいましょう。友達にも見せてあげま

しょう。自分の創作ノートがだんだんふえていくことは楽しみなものです。創作によって私達の心も豊かさがましていくことでしょう。

私達の、伝統あるこの学校文集「山峽の子」をみんなの手でひろげ発展させていきたいものです。

この文集の編集にあたった文化委員 (藤田 光江)

長谷敏男	西尾千鶴子
小谷隆彦	下田恵子
栗谷幹雄	森田智子
西尾勝実	田中幸江
山下智明	中谷裕見恵
山本幸一	田中貴美子

『山峽の子』 第20号

昭和四十六年三月十五日 印刷
昭和四十六年三月十五日 発行

編集 八頭郡佐治中学校生徒会文化委員会

発行所 八頭郡佐治中学校生徒会

印刷所 智頭加藤印刷

電話チズ五一〇七五六